

Book List ～沖縄の先生による、今読むべきこの15冊～ Vol.3

音楽が生まれる場を読み解く 多文化時代の音楽について考えるための15冊

選者: 向井大策 (沖縄県立芸術大学音楽学部准教授、近現代音楽史／音楽美学)

選者略歴: 東京藝術大学音楽学部楽理科卒業 (アカンサス音楽賞)、同大学大学院音楽研究科博士後期課程修了。
博士号 (音楽学)。文化庁・大学における文化芸術推進事業「今を生きる人々と育む地域芸能の未来」事業統括・プログラムディレクター。

県立芸大の
先生が選ぶ
おすすめ本!



クリストファー・スモール

『ミュージッキング 音楽は〈行為〉である』

野澤豊一、西島千尋訳、水声社、2011

761.1/SM1/

音楽を「作品」や「モノ」ではなく、「行為」や「活動」の中に捉えなおす「ミュージッキング」の概念を提唱し、音楽研究に転換をもたらした画期的な著作です。「ミュージッキング (音楽する)」とは、作曲や演奏だけにとどまりません。音楽を聴くことや音楽に合わせて体を動かすこと、リハーサルや練習、また楽器の調整やチケットのもぎり、会場の掃除までも「音楽すること」に含まれると、著者は言います。そして、シンフォニーコンサートを多角的に分析しながら、私たちが、そうした行為の中に実現される「関係性」に音楽の意味や価値、機能を見出していることを明らかにします。現代社会において、音楽と関わって生きていくことの意味についても考えさせてくれる一冊です。



マイク・モラスキー

『ジャズ喫茶論 戦後の日本文化を歩く』

筑摩書房、2010

764.7/MO22/

「ジャズ喫茶」という場から、戦後日本の文化史をひもとくユニークな一冊。著者は、ジャズ喫茶という特別な空間で形づくられる人間関係や、レコードというメディアを介した音楽に対する独特な価値観と鑑賞態度、そのすべてを引っ括めたジャズ喫茶固有の「文化」を、当事者のインタビューから浮かび上がらせました。著者はまた、ジャズ喫茶を東京中心の都市文化としてのみ捉えるのではなく、全国をくまなく調査し、佐世保や沖縄の基地の町や、熱海や新潟の歓楽街、四国の今治のような地方都市のジャズ喫茶にも目を向けます。研究書としてだけでなく、ジャズ喫茶を愛してやまない (著者自身も含む) 人々の人生を綴った音楽紀行文としても味わえる一冊です。



呉屋 淳子

『「学校芸能」の民族誌 創造される八重山芸能』

森話社、2017

K/386/G74/

学校で八重山芸能を実践する石垣市内の3つの県立高校の緻密なフィールドワークから、現代における民俗芸能の新しい継承形態を明らかにする研究書。著者は本書で「学校芸能」という新たな概念を提示します。国や自治体の教育・文化政策の影響を受けながらも、したたかに民俗芸能の実践を学校教育に位置づける学校。また、民俗芸能の継承基盤である地域との密接な結びつきを通して、高校生たちはコミュニティの持続可能性に大きな役割を果たすようになっていきます。「真正性」をめぐる言説を乗り越えて、「学校芸能」を学校と地域社会の相互作用から生まれた新たな地域文化として捉え、さらに学校という場が持つ多様な機能と役割を示すことで、民俗芸能の持続可能な継承の可能性を探る一冊です。



三島わかな
『近代沖縄の音楽受容
伝統・創作・アイデンティティ』
森話社、2014

「洋楽」という異文化との出会いは、近代沖縄人のアイデンティティ形成にどのような影響を与えたのか。音楽教育や創作、演奏会など、明治から昭和初期の沖縄における音楽受容の諸相と、近代沖縄における伝統音楽をめぐる価値観の形成を豊富な史料を渉猟しながら解き明かします。

K/76/MI53/



東谷護
『進駐軍クラブから歌謡曲へ
戦後日本ポピュラー音楽の黎明期』
みすず書房、2005

戦後日本のポピュラー音楽文化はどのように始まったのか。戦後の「アメリカ体験」が日本のポピュラー音楽に与えた影響に着目しながら、米軍占領下の進駐軍クラブで音楽家や従業員として働いた当事者へのインタビューを通して、その閉じられた空間での音楽実践の実態を実証的に解明します。

764.7/To78



奥中康人
『和洋折衷音楽史』
春秋社、2014

西洋音楽という「異文化」と出会いによって、幕末以降の日本人たちが生み出してきた「和洋折衷」の音楽実践の歴史をひもとく一冊。多種多様な西洋音楽の「土着化」の事例から、ユニークな「和洋折衷」の文化の中に、人々の豊かな音楽的創造性が宿ってきたことを浮かび上がらせてます。

762.1/O56/



中町信孝
『「アラブの春」と音楽
若者たちの愛国とプロテスト』
DU BOOKS、2016

民族、国家、宗教への帰属や一体感を表現してきたエジプトのポピュラー音楽。一方で、「アラブの春」(2010～11年)以降、体制に反旗を翻す若者たちによってプロテスト・ソングが歌われ始めます。歌詞やビデオクリップを詳細に分析しながら、変動する政治体制と音楽の関係をあぶり出します。

762.42/N35/



アレックス・ロス
『20世紀を語る音楽1』
柿沼敏江訳、みすず書房、2010

20世紀音楽史としてだけでなく、新たな視点から書かれた文化史としても読み応えのある2巻本。第1巻が取り扱うのは、第二次世界大戦直前まで。著者は、20世紀前半の急激な社会変容が新しい音楽を生み出す肥沃な土壌そのものであったことを、豊富なエピソードとともに語っていきます。

762.07/R73/1



キース・ニーガス
『ポピュラー音楽理論入門』
安田昌弘訳、水声社、2004

ポピュラー音楽に関する社会学的な理論の入門書。「聴衆」、「産業」、「媒介」、「地理」など、ポピュラー音楽を社会的に分析するための7つの視点／概念から、豊富な事例をもとに、現代社会におけるポピュラー音楽の意味や機能を読み解く理論を提示してくれます。

764.7/N62/



宋安鍾
『在日音楽の100年』
青土社、2009

戦前・戦中・戦後における在日朝鮮・韓国人の音楽家・芸能家たちのライフヒストリーをたどる一冊。国境に翻弄され、あるいは国境を乗り越えて、音楽に自らの生き様を託していく彼らの物語を追いながら、著者は「在日している(諸)音楽」という多文化公共圏の可能性を構想します。

767.8/SO95/



長木誠司
『戦後の音楽
芸術音楽のポリティクスとポエティクス』
作品社、2010

GHQの音楽政策、うたごえ・合唱運動、オペラ、映画音楽、放送など、従来の作曲家・作品中心の音楽史記述からは抜け落ちていた領域を緻密な史料調査を通じて掘り下げながら、一つの時代を形づくった「文化」としての戦後日本の芸術音楽の多面性を描き出します。全517ページの大作。

762.1/C53/



大石始
『ニッポンのマツリズム
盆踊り・祭りと出会う旅』
ケイコ・K・オオイシ写真、アルテスパブリッシング、2016

青森から沖縄まで、祝祭空間に鳴り響く歌とリズムを追って、著者は旅をします。人々は祭りと盆踊りに何を込めて受け継いできたのか。歌とリズムの中に刻まれた、かつてその土地に生きた人々の記憶に想いを馳せながら、日本各地の盆踊りや祭りの担い手たちの姿を生き生きと描き出していきます。

K/386/O33/



伊東信宏
『中東欧音楽の回路
ロマ・クレズマー・20世紀の前衛』
岩波書店、2009

モルドヴァのブラスバンド、レハールのオペレッタ、ブルガリアン・ポップ・フォーク、そしてバルトーク、リグゼティらの現代音楽まで、ジャンルを超え、民俗的な想像力とローカルな創造力が交差するところで生まれる中東欧の多文化的な音楽の諸相を縦横無尽に描き出す一冊です。

726.34/189



アレックス・ロス
『20世紀を語る音楽2』
柿沼敏江訳、みすず書房、2010

第2巻が取り扱うのは20世紀後半。著者は緊迫した20世紀の政治と音楽の関係に切り込みます。一方で、ジャンルの垣根を超え、多様性を象徴するいくつもの流れの中で試行錯誤する芸術家たち。排他性と多様性の間で「人々が共有する符号」としての音楽文化を志向する時代の流れが描き出されます。

762.07/R73/2



増野亜子編
『民族音楽学 12の視点』
徳丸吉彦監修、音楽之友社、2016

世界の様々な音楽を、音楽と人の関わりから理解する民族音楽学の入門書。身体、舞踊、楽譜、声と言葉、伝承、文化政策、マイノリティ、アイデンティティ、グローバリ化など、12のテーマを様々な事例とともに論じ、複数の文化を横断しながら考える面白さに気づかせてくれる一冊です。

761.15/MA64/